

六郷特別出張所管内	
人口	男31,881名
	女29,784名
	計61,665名
世帯数	26,569世帯
平成8年5月1日現在	

六郷わがまち

発行 わがまち大田
 六郷地区推進委員会
 編集 「六郷わがまち」編集委員会
 事務局 大田区六郷特別出張所
 〒144 大田区仲六郷2-42-2
 電話 03(3732)4885(代)

特集

〈上〉



ここに特集した70代80代のお年寄りの口伝は、近現代における「六郷わがまち」の変貌を、まさまざと物語る貴重なものばかりです。昔話・世間話・伝説など、多くの方に協力を得ましたので、とても1回では収録しきれません。引き続き次号でも紹介していきたいと思えます。ご期待ください。

汽車に化けた狸

明治5年(1872)に、汽車が開通してから間もないころのお話です。

こちらから行くでしょう、汽車がね。そうすると、向こうからも汽車が来るんですって。そいでね。運転手がびっくりして、急ブレーキかけて止めるとパッとなくなっちゃうんですって。何回もそんなことがあったらしいんです。あるとき、とても元気のいい運転手が「えーいっ」て、ぶつかってもかまわないって走って行ったらね。明るる日、そこに大きなタヌキが死んでいました。



六郷神社の構え堀

今でも神社の正面に太鼓橋のこつてるように、むかしは神社の周りまわをグルリと堀がめぐっていたんです。その構え堀には、五反田川という六郷用水の支流が流れ込んでいたから、とても水がきれいだった。

わたしたちは、太鼓橋の欄干らんかんにある凹みに草や花を入れ、それを石で叩いて色水をつくって遊んだり、夏はその上から飛び込んで泳いだりした。藻が茂っていたが手ごろな水練場で、わたしが初めて泳ぎを覚えたのもここでした。小ブナや手長エビもよく釣れましたね。

せきの神様

むかしね、八幡様の太鼓橋を渡った右側に、加茂の明神様あきのみじんさままつった小さな祠ほこらがあったんです。せきの神様でね、ご利益をさずかった人は、甘酒のびんや甘酒をいれた竹筒を祠の格子こうしに結んでね、お礼参りをしたものです。

いぼとり地蔵

赤門の寺といわれる宝珠院ほうしゅういんに、お地藏さんがあるでしょう。あれは、いぼとり地蔵といつてね、願掛けがんがけすると、手や足にできたいぼが奇妙にとれたんです。ポロリとね。いぼとり地蔵は、道塚みちづか(新蒲田三丁目)の大楽寺にもありましたね。

アッハッハツの話

むかし八幡塚はちまんづかと雑色ざしきの間には、六郷むこうといてね、東海道名残りの松並木が続いていて、とてもさびしかったんです。誰ですかね、夕方らしい湯に行くのにそこを通ったら、そしたらね、松の木の上の方からアッハッハツて声が聞こえたというの。それでも一目散に、もらい湯の家へ走り込んで、戸をピシヤンと閉めてね、「今、怖かったんだよおー」って言ったたら、耳のそばで、「怖かったかあ」って。母親代わりの叔母からその話を聞いてると、ぞおとしちゃってね。で、知っているくせにね。また「あのアッハッハツの話してよ」って言いながら、小さくなっていったの。

おまじない

亡くなった母(明治24年生まれ)は、とても針仕事が好きでしたが、それでも縫い物をしていて針を見失うことがある。行

お伊勢の森の大蛇

羽田の人がね、川崎の町へ遊びに行く途中、お伊勢の森(南六郷三丁目の旧土手際)にあった天祖神社の森で一休みしようと、丸太に腰をおろしてね。タバコをすってキセルの灰を落とそうと、ポンと丸太をたたいたら、それが大蛇だいじだったとか。もう、驚いたのなんのって。



キツネの嫁入り

お伊勢の森があったころ、キツネの嫁入りを見たことがあるんだよ。ロウソクの火のようなものが、ずうっと旧土手の中ほどに続いてた。そのころ、父親が酔っぱらってね、天ぶらの折詰おちづめなんかを肩に掛けてくると、いつのまにかなくなるといいうから、キツネやタヌキは相当いたんじゃないの。

さしえ 池田仙三郎

追剥と人さらい

わたしはいま85歳ですが、子どものころ、雑色駅のあたりは宿雑色といい、わたしの家がある水門付近を下雑色といっていましたね。いまのバス通りは旧土手の跡で、両側は竹やぶや雑木林でした。土手の上の道は狭くて大八車がすれちがえないんですよ。で、ところどころに車寄せ場ができていて、家の前には目印に大きなクスノキが1本ありましたね。

下雑色には小泉、森、川田といったわらび屋根の農家があって、主に梨や桃を栽培してたんですが、夜は真っ暗で、提灯をつけなければ歩けません。それによく追剥が出たんですよ。あるとき女のひとが身ぐるみはがれ、おこし一つで助けを求めて来たので、着物を貸してあげたことがあります。それから、麦畠に人さらいが隠れていて、子どもがさらわれた、なんて話も聞きましたね。



関東大震災は、わたしが12歳のときで、梨や桃をザルに入れて国道まで運び、戸板の上に並べて売りましたよ。お金を持ってない人にはただあげました。子どものころ一番楽しかったのは八幡様のお祭り、戸板女学校時代には蒲田の松竹キネマによく寄り道しましたね。

区政功労者5氏表彰

平成7年度の大田区政功労者として、岩金みつ、大橋六松、鈴木時直、早川和廣、高橋文男(順不同)のみなさんに、3月15日、区民プラザで西野区長から表彰状と記念品が贈られました。

東六郷共同溝見学会

3月9日午後2時、六郷神社に集合、国道地下に完成した共同溝の内部を、神社前から六郷橋付近まで見学。参加者は300名以上。

第45回大田区子どもガーデンパーティー

4月28日午前10時より開かれた六郷会場は、絶好の快晴に恵まれ、多彩な行事に7,136名参加という大盛況でした。

はんごさんちの牛

なんでも先祖は、六郷用水をつくるころ、川崎の方から六郷に移ってきたという話です。だから小泉という名字はひよっとすると、川崎の小杉に陣屋を設けて、六郷用水や二ヶ領用水の工事を指揮監督した代官・小泉次大夫と、ひっかかりがあるのかも知れませんね。

わたしの家の屋号は、「はんごさん」といいました。おじいさんの名前が半蔵だったからでしょう。村の人は、仕事を怠けて食っちゃ寝、食っちゃ寝してる者を見ると、「はんごさんちの牛になっちゃうぞ」なんて言っていましたね。

おじいさんは明治7年(1874)の台湾出兵に行ったんですが、父(直次郎)も近衛兵として日清・日露の戦争に二度も出征してるんです。お酒が好きだったので、姉と一緒によく上田(本羽田一丁目)の「ゆうやこ」という土手つぶちのよろず屋に、1升徳利を持って、お酒を買いに行きましたね。

むかしは、わたしの家でも梨や桃をたくさん作っていましたね。兄(由雄)の話だと、明治43年(1910)に梨山5反、桃山3反5畝で、13万5千個の袋掛けをしたのが、最高だったそうですよ。

法被に人魂のあと

そのころ父親は、飲み水に事欠く羽田の方へ、六郷川のきれいな水を売りに行く水船の船頭をしてました。

ある日の夕暮れ、仲間とほろ酔い機嫌で帰ってくる途中、河原で人魂にぶつかったんです。びっくりしたものの、勇気をだしてエイッとばかり、法被(しるしばんてん)で人魂を払っ

た。そしてね、あくる朝早く法被を見たら、丸い脂のあとがベツトリ付いていたんですって。



人魂ならぬ金魂

どこかで人が死んだとかいうと、金魂が飛んでくる。人魂とは違うんだよ。人魂っていうのは尾を曳いてるのに、これは丸いんだよね。それが落っこったところへ風呂敷をかぶせると、お金が入るとか、大金持ちになるとか、いったね。

六郷橋の人柱

前の六郷橋は大正14年(1925)にできたんですが、その橋脚工事の事故で男女6人が亡くなってね、あれは人柱だ、なんていわれたんですよ。それから60年たった昭和59年に今の橋ができて、前の六郷橋のアーチを撤去するとき、またもや事故が起きてね、5人の男が殉職しました。因縁というんでしょうかね。

高畑の化け物屋敷

わたしは大正2年(1913)生まれなんです。子どものころ近くに西洋館が建ってね、3日間ばかり留守番を頼まれ、友だちと一緒に泊まりにいったところがあるんです。夜中、小用に

たった天井が鳴いてね、もう気味悪くて、こわくてねえ。あとで聞いたら、どこかの御神木を天井板に使ったとかいう話でした。その後、この西洋館は「化け物屋敷」と呼ばれて、住む人もなく、屋なお暗い木立ちの中にシーンと静まり返っていましたね。

砂利船で子守り

紀伊国屋のおんちゃんって人が、天王木にいてね、自分ちの砂利船に子どもたちを乗せて、子守りしてくれるのよ。お昼食べて少したつと、六郷のこっちは岸は深いから、向こう岸までつれてってくれて、シジミを手で掘ったり遊ばしてくるわけ。おんちゃんは、あたしが6年生ぐらいまでいたかな。

ニトウ塚のシジミ

六郷文化センターのすぐ裏の道から斜めにニトウ塚と呼ばれる踏切が、むかしあったんですよ。その下に埋められた太い土管の中を、六郷用水が流れていたんですが、その入口でとれるシジミは、とても良く黄疸に効いたんです。それで村中みんなが大事にしていたね、1回に30粒ぐらいしかとってはいけないう仕りになってたんですよ。

★話者のみなさん

今回、六郷のむかしばなしを口伝えしてくださったのは、次のみなさんです。心から御礼を申し上げます。(敬称略)
川田たみ(明治44年生) 小泉フク(大正2年生) 小関信雄(大正2年生) 加藤たま(大正2年生) 鳥本盛士(大正5年生) 小林貞子(大正6年生) 金輪次郎(大正7年生) 戸川静子(大正13年生) 平野順治(大正13年生)

六郷の草たち ⑫

夏のころ1m以上もある大形の草が、六郷川の岸辺や鉄橋の下などに、小さな白い花をまとまって



イタドリ

(タデ科)

咲かせているのがイタドリです。別名スカンボと呼ばれ、春先にタケノコに似た芽をし、かじると酸っぱい味がして、子どものころを思い出します。

イタドリの方言名は500種以上もあるそうで、日本各地で食用や薬用に利用され、親しまれていることがわかります。(古屋のり子)